

桐朋学園大学大学院 修士課程

# 修了演奏発表

<大学院修士課程2年>

弦楽器 (Vl.Va)

2019年1月21日(月) 13:00開演 (12:30開場)

桐朋学園大学 調布キャンパス C001教室

【13時00分～】

竹田 樹莉果

共演者：諸田 由里子

Gabriel Fauré

Sonata Pour Violon et Piano No,1 en La majeur, Op.13

Eugène Ysaÿe

Six Sonates Pour Violon Seul No,3 en ré mineur, Op.27

Camille Saint-Saëns

Introduction et Rondo Capriccioso en la mineur, Op.28

Gabriel Fauré

Sonata Pour Violon et Piano No,1 en La majeur, Op.13

- I. Allegro molto 2分の2拍子 イ長調 ソナタ形式
- II. Andante 8分の9拍子 ニ短調 ソナタ形式
- III. Allegro vivo 8分の2拍子(4分の1拍子) イ長調 複合三部形式
- IV. Allegro quasi presto 8分の6拍子 イ長調 ソナタ形式

フォーレは1845年にパミエで生まれた作曲家、オルガニストである。4歳の頃から礼拝堂で何時間も過ごし、リード・オルガンを弾くなどして音楽を楽しんでいた。

15歳の頃にはカミーユ・サン＝サーンスとの生涯においてきわめて重要な出会いがもたらされ、後にフォーレは、サン＝サーンスのおかげで「今日の自分があるのだ」と公言している。サン＝サーンス等が発起人となり1871年2月25日に結成された国民音楽協会の会員としても活動し、フォーレは「プティ・パリジヤン紙」(1922年4月28日)の記者に対して、「本当のことを言うと、1870年以前には、私はソナタや四重奏曲を書きたいとは思ってなかった。当時は、若い作曲家の作品が演奏される場などなかったからだ……。サン＝サーンスが1871年に国民音楽協会を設立した大きな目的は、まさに若い音楽家たちの作品を演奏することにあつたのであり、私もそのために室内楽をつくるようになったのである。」と述べている。

この頃、フォーレはパリの実業家カミーユ・クレールの屋敷に何度も滞在している。クレール夫妻は数多くの演奏会を開き、著名な演奏家たちの演奏を人々に聴かせており、ベルギーの偉大なヴァイオリン奏者、ユベール・レオナルもその演奏家の一人であった。ヴェータンに師事し、ブリュッセルのコンセルヴァトワールで教授を務めていたレオナルは、フォーレの《ヴァイオリン・ソナタ第1番》の作品には積極的に協力したものと推測される。1875年の夏、ル・アーヴル近郊のサント＝アドレスにあった夫妻の屋敷に長期滞在し、その間にレオナルからこの楽器の演奏技法について多くのことを学び、《ヴァイオリン・ソナタ第1番》のほとんどはその時に作曲された。彼との出会いと、サン＝サーンスの指導がなければ、フォーレは最初の傑作となった《ヴァイオリン・ソナタ第1番》作品13を書くことはなかったかもしれない。

作品は翌年(1876)の夏に完成し、ヴァイオリニストのポール・ヴィアルドに捧げられた。翌1877年1月27日に国民音楽協会の演奏会にてマリー・タヨーのヴァイオリン、ピアノはフォーレ自身の演奏で初演された。演奏会は成功を収めたが、作品の出版については困難が待ち受けており、数曲の歌曲を買い上げていたシューダンス社も室内楽曲であることを理由に拒絶した。結局、クレールの尽力やサン＝サーンス等の推薦により1876年11月にドイツにあるブライトコプフ・ウント・ヘルテル社と契約は結ばれ出版さ

れたが、フォーレの名前はドイツでは知られておらず、フォーレは作品に関する全ての権利を同社に委ねなければならなかった。

Eugène Ysaÿe

Six Sonates Pour Violon Seul No,3 en ré mineur, Op.27

イザイは1858年、ベルギー東部の古都、リエージュに生まれた。4歳から父の教えによりヴァイオリンを弾くようになり、ヴュータンやヴィエニャフスキに師事した。

《無伴奏ヴァイオリンソナタ》全6曲が書かれたのは晩年の1923年夏、ヘット・ゾウテの別荘で書き上げられた。第1番の献呈先でもあるハンガリー出身のヴァイオリニスト、ヨーゼフ・シゲティの演奏するバッハが作曲のきっかけになったと言われている。ほとんど一晩のうちに全てのスケッチが出来上がったと伝えられている。イザイは1曲ずつ構成したのではなく6曲全ての音楽のイメージが頭の中にあっただということになる。この曲にはバッハの要素、パガニーニの要素はもちろん、ヴァイオリンソロとは遠く掛け離れているヴァーグナーの影響が第1番の冒頭からみられる。出版は翌1924年、兄ジョゼの仲介により行われた。

第3番は「バラード」という副題を持つ単一楽章形式で書かれており、ジョルジュ・エネスクに捧げられた。ロンド形式で大きく序奏と主部に分かれている。

Camille Saint-Saëns

Introduction et Rondo Capriccioso en la mineur, Op.28

サン=サーンスは1835年にパリで生まれた作曲家であり、ピアニスト、オルガニストとしても活躍した。

《序奏とロンド・カプリチオーソ》は1863年に作曲され、スペイン出身のヴァイオリニスト、パブロ・サラサーテに献呈された。サン=サーンスは他にもヴァイオリンとオーケストラのための曲として《ハバネラ》《カプリス・アンダルチア》の2曲を作曲している。

この曲はサラサーテに献呈されたということもあり、スペインの要素を取り入れた作品となっている。ゆったりとした2拍子でため息のモチーフを用いたメランコリックな雰囲気のある序奏で始まり、その後、トリルにて高揚し、冷静かつ情熱的なロンドとへと続く。ロンド主題は8分の6拍子で、キッパリとリズムを刻む伴奏の上でソロが奏される。曲名のカプリチオーソ(capriccioso)はカプリチオ(capriccio)「奇想」の形容詞で、「気ままに」という意味である。オーケストラ伴奏版がオリジナルだが、ビゼーによるピアノ伴奏版で演奏される事も多い。

齋藤 光

共演者：小森谷 裕子

Mozart : Sonate für Klavier und Violine No.21 emoll K.304

Beethoven:Sonate für Klavier und Violine No.9 Adur Op.47 "Kreutzer"

Mozart:Sonate für Klavier und Violine No.21 emoll K.304

I. Allegro

II. Tempo di Menuetto

モーツァルトの初期の様式であるヴァイオリン伴奏付きのピアノ・ソナタとは異なる、主体がピアノに置かれながらも両楽器が対等の関係で協奏し合う様式のヴァイオリン・ソナタをモーツァルトが初めて意識しながら書いたとされているマンハイム・ソナタの一つのK. 304は1778年に作曲された。近年の研究においてはマンハイムで着手されたことが明らかになっているが、自筆譜にはパリで書かれたということが記されている。この作品は彼のヴァイオリン・ソナタの中で唯一の短調であることから自身の就職活動の失敗や失恋等様々な説が関連付けられている。これらの説の真相は明らかではないがモーツァルトの生涯において困難な時期であったということは確かであり、ホ短調という不安や深い悲しみが表現される調の特性、1楽章冒頭のユニゾンで提示される緊張感漂う主題や強弱の劇的な対比、2楽章の哀愁漂う主題、そして長調から短調へと一気に現実に戻されるかのような表現等からこの時期に作曲された短調の作品の背景に当時のモーツァルトの心境が表れているという可能性が感じられるのではないだろうか。

Beethoven: Sonate für Klavier und Violine No.9 Adur Op. 47 “Kreutzer”

I. Adagio sostenuto - Presto

II. Andante con Variazioni

III. Presto

モーツァルトが最後にヴァイオリン・ソナタを作曲してから10年後にヴァイオリン・ソナタの作曲を始めたベートーヴェンは一層ヴァイオリンの活躍に焦点を当てた。両楽器が今まで以上に対等に張り合うべきだと考えたベートーヴェンはヴァイオリンの表現法の更なる可能性を追求してヴァイオリン・パートの充実を図り、両楽器が対等の関係で協奏し合う様式のヴァイオリン・ソナタを発展し確立させた。この新しい様式は後世の作曲家達にも大きな影響を及ぼしたのである。1803年に作曲されクロイツェルに献呈されたヴァイオリン・ソナタ9番は「ほとんど協奏曲のように、極めて協奏風に書かれた、ヴァイオリン助奏付きのピアノ・ソナタ」とベートーヴェン自身書いていることから、とりわけヴァイオリンの重要性が明らかである。1楽章のヴァイオリンの堂々たる独奏で始まる序奏はヴァイオリンの強い存在感が印象付けられ、直ちにエネルギッシュで非常に技巧的な掛け合いが展開される。2楽章は1楽章と打って変わって穏やかな主題で始まり両楽器の活躍が効果的に生かされた4つの変奏とコーダによって構成されている。3楽章は2楽章の静寂を強烈に打ち破る衝撃的なピアノの主和音から始まり、華麗なタランテラ的リズムで疾走される。ヴァイオリン・ソナタというジャンルに対するベートーヴェンの新たな挑戦が伺える。

小平 怜奈

共演者：田中 英明

Mozart : Sonate für Klavier und Violine A-dur KV.526

Sibelius : Violin Concerto d-moll Op.47 第1楽章

Mozart : Sonate für Klavier und Violine A-dur KV. 526

第1楽章 Molto Allegro 6/8 拍子

第2楽章 Andante 4/4 拍子

第3楽章 Presto 2/2 拍子

モーツァルトのヴァイオリン・ソナタ KV. 526 は、1787 年にウィーンで作曲された。この曲はオペラ《ドン・ジョヴァンニ》を作曲中の作品である。モーツァルトは数多くのヴァイオリン・ソナタを作曲しているが、ヴァイオリン・ソナタとしては最後から 2 番目の作品である。

輝かしく推進力に富んだ爽快な第 1、3 楽章と、モーツァルトの後期作品らしい深みのある第 2 楽章という構想の大きさからモーツァルトのヴァイオリン・ソナタの中では最大規模を示す。モーツァルトの初期のソナタと異なり、ヴァイオリンとピアノが対等な作品である。

Sibelius : Violin Concerto d-moll Op. 47 第 1 楽章

第 1 楽章 Allegro moderato 2/2 拍子

シベリウスのヴァイオリン協奏曲は、1903 年作曲、1905 年に改訂された。シベリウスが残した唯一の協奏曲である。1903～1905 年は数々の交響詩や交響曲第 1 番と第 2 番を作曲したあとで、円熟さが増した時期である。この協奏曲にも表現や技巧に円熟の深さが見られる。カデンツァが中間部にあるのは特徴的である。今日頻繁に演奏されている改訂版は、初稿版のいくつかのパッセージを大幅に削除して楽曲を凝縮した。

本日演奏する第 1 楽章の冒頭は、フィンランドの自然を思わせる曲想や響きが非常に幻想的である。シベリウスは、この冒頭について「極寒の澄み切った北の空を、悠然と滑空する鷲のように」と述べた。

城所 素雅

## Paganini 24 caprices op1

ニコロ・パガニーニ —— 《24 のカプリス》より抜粋——

城所 素雅

平成 30 年度 桐朋学園大学大学院修士

パガニーニ(1782—1840)の《24 のカプリス》は技巧的難度からコンクール等の課題曲として取り扱われることが少なくない。ヴァイオリン演奏家にとってメジャーな作曲家であると言える。しかし《24 のカプリス》の成立については明らかになっていない。この作品がどのように作曲され、そこにどのような演奏技法が集約されているのかは、18 世紀末から 19 世紀前期にかけてのヴァイオリンのための音楽の歴史を考える上で極めて重要な意味を持つ。パガニーニが《24 のカプリス》の作曲をし始めた年が 1802 年、パガニーニ 20 歳の時である。この作品がリコルディから刊行されるのは、作曲からはるかに時を隔てた 1817 年である。つまり作曲から出版までは 1802-1817 年のおよそ 16 年間にわたることになる。そのため《24 のカプリス》が同時期に纏まって作曲されたのではなく、むしろこの 24 曲にはいくつかのグループがあり、段階的に書き進められ、最終的に出版のために 24 曲が揃えられたと考えられる。パガニーニ《24 のカプリス》の自筆譜においても第 1 番から第 6 番まで、第 7 番から第 12 番まで、第 13 番から第 24 番まででの 6 作品、6 作品、12 作品の 3 つに区切られている。しかしこの事実はあまり一般的ではなく、実際に演奏される際に考慮されることは全くと言っていいほどない。今回の演奏ではこの区切りごとに小休止を挟み、曲選を行っている。

パガニーニ《24 のカプリス》内のいくつかの作品には元となった作品が存在する。例えば、パガニーニ《24

のカプリス》第1番、第2番は明らかにロカテッリ《25のカプリス》を参考にしていると言える。《24のカプリス》第2番、第5番はクロイツェルの《40の練習曲集》の影響を受けている。

角田 峻史

共演者：河合 丈則

Tibor Serly・Rhapsody for Viola and Orchestra.  
Béla Bartók・Viola Concerto, Op. posth. (ed. Serly)

河合 丈則・狂乱劇 ～ヴィオラ・ソロの為の～

ティボール・シェルイ

ヴィオラと管弦楽のラブソディー

ティボール・シェルイ Tibor Serly(1901～1978)はハンガリーの作曲家であり、また優れたヴィオラ奏者でもあった。ベーラ・バルトク Béla Bartók(1881～1945)のヴィオラ協奏曲の補筆者としてその名は広く知られている。

この曲は1947年～1948年の間に作曲され、補筆作業中である1945年～1949年と作曲時期が重なっている。

曲はバルトクのピアノ曲集「子供のために」を素材としており、演奏技法はシェルイがヴィオラ奏者であった事から、スル・ポンティチェロ、トレモロ、フラジオレットやピチカートなど弦楽器の技巧が多く使われている。

ベーラ・バルトク

ヴィオラ協奏曲(遺作)

この曲は、スコットランド出身のヴィオラ奏者であるウィリアム・プリムローズ William Primrose(1904～1982)の委嘱によりバルトクが作曲した。

しかし作曲途中にバルトクは急逝してしまい、残されたスケッチを参考に友人であるシェルイが補筆を行い、4年の歳月をかけ完成させた。1995年にバルトクの息子により改訂版が発表されたが、本日はシェルイ補筆版を演奏する。

### 第1楽章 Moderato

バルトクが自分の死を予期していたかのような、ミステリアスであり、不穏な雰囲気をつづらせたヴィオラ・ソロから始まる。曲はソナタ形式で書かれており、終結部で急速な下降音階をヴィオラ・ソロが奏でた後、アタッカで第2楽章へ進む。

### 第2楽章 Adagio religioso

瞑想的と思わせる音楽であり、3部形式からなる。この楽章でもアタッカで曲は進んでいく

### 第3楽章 Allegro vivace

民族舞曲風のフィナーレであり、ロンド形式で書かれている。途中牧歌風のトリオ部を挟み、その後急速

に盛り上がり全曲を閉じる。

河合丈則

委嘱作品 狂乱劇 ～ヴィオラ・ソロの為の～

数年前、広島や長崎へ旅行に行った。その時、原爆ドーム・原爆記念館等、原爆に関する施設や場所へ廻った。今回の作品は、その時に感じ得た、被爆者の感情を基に作られた音楽である。

彼らの感情、それは感情という概念における、最高点に達するものではないだろうか。あらゆる感情が一つに終結し、カオスに混ざる、狂気の中の狂気そのものではなからうか。

題名に「劇」とついている通り、曲は幻想曲風の構造により成り立っている。また、「4(=死)」と「9(=苦)」という概念がこの曲全般に行き届いており、箇所によってこの二つの数字の指す内容も変わる。言い換えると、二つの数字からしてみると、変奏曲風とも言える。(河合)

Stamitz viola concerto op.1 1st mov.

Brahms viola sonata op,120-2

Prokofiev Romeo and Juliet

シュターミッツ ヴィオラ協奏曲 op.1 第1楽章 ニ長調 アレグロ

カール・シュターミッツは1745年、マンハイムで生まれる。父、ヨハン・シュターミッツはマンハイム楽派の創設者であり、弟のアントン・シュターミッツと共に、マンハイム宮廷楽団でヴァイオリン奏者として活躍した。本作品にもマンハイム楽派の特徴が多くみられ、例えば、強弱が細かく指示され、旋律に重きを置き、技巧的に書かれている。本作品は今日、多くのオーケストラの、入団オーディション等の課題曲となっている。

ブラームス ヴィオラソナタ 第2番

本作品は、ブラームスの晩年にクラリネットのために書いた作品であり、のちに本人によってヴィオラとピアノに編曲が施された。ブラームス、最後の室内楽曲である。ブラームスは1891年にドイツ＝マイニンゲンで、宮廷楽団のクラリネット奏者、リヒャルト・ミュールフェルトと出会う。ミュールフェルトの演奏するモーツァルトやヴェーバーの協奏曲を聞いたブラームスはクラリネットの音に魅了され、同年に《クラリネット三重奏曲》作品114と《クラリネット5重奏曲》作品115を作曲している。1892年以降、姉や親しくしていた人々を亡くした中で作曲された。熱っぽくも甘く、情緒的な旋律を持ち、ブラームスの最期の香りを残していくかのような作品である。

第1楽章 アレグロ アマービレ Es-Dur ソナタ形式

叙情的で滑らかに流れていく第1主題と、愛らしくと指示され、暖かく穏やかに過ぎて行く第2主題。どちらも、晩年の作品に多く見られる、暗く重たい性格はなく、作曲当時のブラームスが比較的、穏やかな心情であった事が伺える。

第2楽章 アレグロ アパッショナート es-moll 3部形式

第1部は焦燥感を感じる旋律で、熱を帯び、推進力を持つ。しかし第2部では陽の暖かさを感じる穏やかな旋律が流れる。

第3楽章 アンダンテ コン モート Es-Dur 変奏曲形式

1つの主部と6つの変奏からなる、変奏曲形式。ブラームス自身、最後となる変奏曲。どこことなく第1楽章を思わせるモチーフが使われている。

プロコフィエフ バレエ音楽「ロミオとジュリエット」(ワジム・ボリソフスキ編曲)より抜粋

1917年、ロシア革命以降、プロコフィエフは拠点をアメリカやフランスに移し、そこでオペラやバレエ作品で成功を収めていた。そんな中、ソ連からの委託で作曲され、バレエ上演よりも先に、管弦楽版が初演された。また、“死んでしまっただけでは踊る事が出来ない”などの理由から、当初、ジュリエットが服毒する前にロミオが駆けつける、といったハッピーエンドで書かれていたが、不評により、原作通り悲劇に戻された。今日、ロミオが、墓場でジュリエットの死体と踊るパドトゥは、バレエ作品において、大きな見せ場となっている。

Introduction:ロミオとジュリエットの、愛を描いた旋律から始まり、ジュリエットの旋律、さらに、ロミオの旋律へと続く。



The street awakens:人々が目覚め、賑わい始める夜明けの街を描く。

Julia the young girl:十代の少女らしい、活発でおてんばなジュリエットが伺える。この後の夜会で、婚約者であるパリスと会う事を告げられ、迷いや不安、また恋への憧れが表現される旋律も登場する。

Dance of the knights:旧家の重々しく格式張った、威圧感のある旋律。付点を用いる事によってそれらを表している。ジュリエットが場面に登場すると、それとは対照的な甘く優しい旋律が流れる。

Mercutio:ロミオの友人、マキューシオが陽気にふざけて踊る。

Balcony scene:夜会で恋に落ちたロミオとジュリエットのバルコニーでのパドトゥ。途中には、ロミオが喜びで舞う旋律が含まれている。

<ご来場の際のお願い>

音楽部門の警備室にて、お名前を確認できるものをご提示頂きます。

ご提示のない場合や定員を超過した場合は入場をご遠慮頂く場合もございます。

<試験のため、以下の諸点についてご注意くださいたくお願いいたします>

(1) 写真・ビデオ等の撮影・花束贈呈・演奏中の入・退場

はご遠慮ください。

※演奏者交代時等演奏の合間の入・退場は係員の指示に従ってください。

(2) 小学生低学年以下のお子様の入場はご遠慮ください。

(3) 会場内では携帯電話およびアラーム時計等の電源をお切りください。

(4) 採点員席への立ち入りは固くお断りします。

\*今後の修了演奏発表日程\*

1月22日(火)	9:30～	調布キャンパス C008 教室／仙川キャンパス S333 教室
1月23日(水)	9:30～	調布キャンパス C008・C001 教室
1月24日(木)	14:00～	調布キャンパス C008 教室
1月26日(土)	13:00～	調布キャンパス C008 教室

\*曲目等詳しいご案内は こちらまで\*

<http://www.tohomusic.ac.jp/college/graduate/concert.html>

—ご来場をお待ちしております—

桐朋学園大学大学院

電話 042-444-7055 (調布キャンパス代表)

FAX 042-444-7056